

社会教育施設の自己紹介

【館名】

東京都美術館

【施設概要】

福岡出身の実業家佐藤慶太郎による、当時の金額で100万円もの寄付を受けて実現した日本初の恒常的美術展覧会場『東京府美術館』が開館したのは、今から80年前の大正15年5月1日のことでした。

以来、建築家岡田信一郎の設計による近代クラシック様式の美術館は、官設展や二科展、日本美術院展をはじめとする公募団体の展覧会場として親しまれる一方で、様々な企画展を開催して、時流を反映した新たな美術表現や世界的な動向の紹介に努めるなど、常に美術の殿堂としての役割を担ってきました。



【旧館正面玄関】→

↓ 【現在の東京都美術館】



半世紀に渡って親しまれてきた岡田設計の旧館は、施設の老朽化によって昭和50年に新たに建築家前川國男設計による、新館に置き換えられて今日に至っています。

この間、昭和18年都政の施行により名称を東京都美術館と改め、平成7年には東京都現代美術館の開館に伴って、機能の一部や収蔵作品を同館に移管し、機能分化が図られました。収蔵作品を持たない当館では、公募団体への展示室貸出事業、報道機関との共催による企画展事業、広報事業が現在の主たる活動内容となっています。

なお、平成18年度からの指定管理者制度導入により、財団法人東京都歴史文化財団が管理受託者としてその任にあたっています。

【特色ある取組】

現在、東京都美術館を利用する公募団体数は270余りに及んでいます。来年以降、国立新美術館の開館に伴い、一部に利用団体の変動がありますが、当館では都民のための美術の振興を図るという設置目的に即して、新作発表の場としての公募展示室の貸出業務を継続してまいります。

年に3～4本開催している企画展（報道各社との共催展）では、展示に即した講演会や

上映会、ギャラリートークを実施するほか、各展覧会毎に休館日を利用しての障害者特別鑑賞会や、家族で美術鑑賞を楽しんでいただくための親子鑑賞会、小中学生を対象に、美術館を正しく理解し、美術への関心を高めていただくための「美術館裏側めぐり親子見学会」など、各種教育普及プログラムを実施しています。

戦前・戦後を通じて、常に日本の美術の動向とともに歩み続け、平成18年には開館80周年の節目を迎えた東京都美術館は、国立新美術館の開館や大規模改修工事の本格実施などを控えて、さらなる変革期に差し加かろうとしています。

今後は、美術館に対する来館者の期待に応えることができるよう、安全で快適な環境空間の創出と提供に努め、ゆったりとした環境で心ゆくまで美術鑑賞を楽しんで頂くための予約制特別鑑賞会の導入や、レストランやカフェ、ミュージアム・ショップほか付帯設備の整備充実を図るなど、より多彩で魅力的な美術館活動を展開出来るよう、職員一同努力を重ねていく所存です。

【各種教育普及プログラムに関して】

① 障害者特別鑑賞会

当館の企画展示室休室日を活用し、障害をお持ちの方が安心してゆっくりと企画展を鑑賞できるように、ボランティアと協力して、個人（介助者を含めて）での応募方式により、1回あたり約400人の参加をいただき、年に4回（各企画展毎）実施しています。

② 親子鑑賞会

東京都が推進する、『心の東京革命推進事業（とうきょう親子ふれあいキャンペーン）』の一環として実施しているものです。「自然体験、文化活動などにより親子がふれあい、また感動を共有することを通して、子どもが豊かな人間性を身につけ、社会の基本的ルールを体得する活動を推進する」という事業の趣旨を踏まえ、小学校高学年・中学生とその保護者を対象に、事前応募方式（多数の場合は抽選）により、40組の親子をご招待して実施しています。参加者には学芸員が作品解説を行い、展覧会をより楽しめるよう工夫しています。

③ 美術館裏側めぐり親子見学会

通常では立ち入ることのできない、美術館の搬入出口や審査室、作業室等の見学を通じて、美術館の活動や展覧会のしくみを理解し、より親しみと関心を持っていただくことを目的に、小学校4年生から中学生までとその保護者計30組を対象に、年1回実施しています。各セクション毎の説明は、美術館の利用団体や展示業者等、実際に作業に携わるスタッフに依頼して、現場の声を直接聞いていただくよう工夫しています。参加者からは、作品が美術館に搬入されてから展示室に陳列されるまでの過程が流れに沿ってよくわかり、美術館の「ひみつ」を知ることができて親しみを感じた、と好評を博しています。

【これからの企画展示等のご案内】

○フィラデルフィア美術館展 印象派と20世紀の美術

平成19年10月10日(水)～12月24日(月・祝)

本展では、19世紀のコロー、クールベにはじまり、印象派を代表するモネ、ルノワール、ゴッホ、セザンヌを経て、20世紀のピカソ、カンディンスキー、マティス、デュシャン、シャガール、ミロ、マグリットにいたるヨーロッパ絵画の巨匠たち、さらにホーマー、オキーフ、ワイエスなどのアメリカ人画家を加えた47作家の名作77作品を一堂に展示、最も多彩でダイナミックな展開をみせた19世紀後半から20世紀の西洋美術史の流れを辿ります。またとない規模で一堂に展観する傑作の数々をどうぞお見逃しなく。

ピエール＝オーギュスト・ルノワール《ルグラン嬢の肖像》1875年

Philadelphia Museum of Art, The Henry P. McIlhenny Collection in memory of Frances P. McIlhenny, 1986



○ルーヴル美術館展 フランス宮廷の美

平成20年1月24日(木)～4月6日(日)

本展ではルーヴル美術館から選りすぐった名品約140点を展示し、華麗な宮廷美術の粋を紹介いたします。ポンパドゥール夫人好みの繊細な金銀細工や、マリー・アントワネットの趣味が色濃く表れた私室の書き物机、旅行用携行品入れなど、多くが日本初公開です。

2008年新春の「華麗なるルーヴル展」にどうぞご期待下さい。

展覧会公式サイト → <http://www.asahi.com/louvre08/>

アントワヌ＝セバスチアン・デュラン「塩入れ」 1758-59年

© 2007 Musée du Louvre / Martine Beck-Coppola



○芸術都市パリの100年展 ルノワール、セザンヌ、ユトリロの生きた街 1830-1930年

平成20年4月25日(金)～7月6日(日)

月曜休室(ただし5月5日は開室)

日仏交流150年を記念し、芸術の中心地パリをテーマとした近代フランス約100年の優れた絵画、彫刻、写真など約150点を、ルーヴル、オルセー、ポンピドゥー、ブティ・パレ、カルナヴァレ、マルモタン、ロダンなど世界的に著名な美術館の出品協力により展示します。



ポール・シニャック「ポン・デ・ザール」1928年

カルナヴァレ美術館蔵

© Musée Carnavalet/Roger-Viollet